

ヨーロッパとの対話

ヨーロッパとの対話

木村尚三郎

木村尚三郎
きむら しょうさぶろう

一九三〇年東京に生まれる

東京大学文学部西洋史学科卒業

東京大学教養学部助教授

フランス史、西洋法社会史専攻

著書に『歴史の発見』『組織の時代』

『西欧文明の原像』など

ヨーロッパとの対話

昭和四十九年八月二十九日 初版
昭和四十九年十一月十一日 再版

著者 木村尚三郎

発行者 黒川 洸

発行所 日本経済新聞社

東京都千代田区大手町一ノ九ノ五

電話 東京(二七〇)〇二五一

郵便番号一〇〇 振替東京五五五

印刷 東光整版印刷

製本 関口製本

はしがき

ヨーロッパは現在ダイナミックに変貌しつつあるが、その基調をなしているのは大陸主義の進展コンティネンタリズムと国家主義ナショナリズムないし地方主義レジオナリズムの強化という、一見相対立する二つの動きである。すなわち現代ヨーロッパは一方で欧州連邦の実現をめざして欧州共同体の経済的・政治的統合を進めているが、他方、歴史上今日ほど国家的なまとまりを強めているときもない。経済の国家レベルにおける計画化・組織化と国家資本主義のいちじるしい発達、また中央に対する地方的個性の表面化がそれである。

しかしそこに看取されるのは、二つの基調のたんなる相克関係ではない。国家の利益を他のすべてに優先させようとする動きはたえず噴出し、そのたびに欧州共同体の危機や解体がさやかれるが、両者は決して単純な二律背反的、二者択一的な関係に立つてはいない。長期的な展望に立つなら、地方の個性を明確にするとともに国家のまとまりをも強化し、そして国家のまとまりを強化するとともに大陸的なまとまりをも大きく前進させてきたのが、ヨーロッパの真実の姿である。

そこに、日本人には容易に理解しがたい、ヨーロッパ的精神風土の一特性が表現されている。ここでは、光と闇、神と悪魔、戦争と平和、愛と憎しみなど、つねに二つの対立概念が共存しており、激しく戦い合いながら、しかも必然的なかわり合いを持っている。光があつてこそ闇があり、また闇があつてこそ光があるというように、ともに相手が必要とし、相手によって自己の存在証明を獲得している。つまり二つの対立概念がそれぞれ徹頭徹尾自己主張を行い、自他の世界をは

つきり区別しながら闘争的に協調し、またむしろ自他の明確化を通していよいよ対立的に一体化するのであり、ここにヨーロッパの本質がある。

私たち日本人は、これとは対照的に朝まだきとか夕暮れのような、むしろ光のなかに闇がにじみ、闇のなかに光が射し込む、ぼんやりした融和的一体化の世界を好む。それは自然風土の相違というべきであろうか。わが国の自然が柔かく湿った空気によって事物の輪郭をぼかし、光の濃淡のみによつて墨絵の世界を描き出すのに対して、ヨーロッパの自然は透明な乾燥した空気のため、きらめく陽光とあざやかな色彩が夏のひととき乱舞し、交響楽を奏で油絵の世界を展開する。ここから、事物の明確な概念化を好むか不分明性を好むかの違いも生じよう。

しかし一方で、ヨーロッパの冬は長く、寒く、そして暗い。いみじくも中世に「神は光なり」とされたように、人々は厳しい冬の現実に耐えながら明日の夏を求め、光を恋いしたう。したがって闇のなかに光を、戦いのうちに平和を、憎しみと不信のうちに愛と信頼を、総じて苦しみの今日のうちに理念の明日を求めつづけてきたのが、ヨーロッパ人だというべきであろうか。

実際、北フランスや西ドイツなど、中世から近代を通してヨーロッパ大陸の政治、経済、文化の中心をなした北西部ヨーロッパは、十一月から四月までのあいだ、厚く低い雲に覆われ、寒い。一年の大半が冷く暗い冬空であるからこそ、人々は自然と対決し、それによつてまた自己を見つめながら、内省と自己統制、自己防御のうちに、トインビーのいう自然の挑戦に対する応戦を行ってきた。彼らによる生活環境のたゆまざる積極的な改善の背後には、つねに明日に生きる意志、明日を

生き抜く精神の明確な表明があった。その意味でヨーロッパ文化は、本質において理念に生きる「冬の文化」だともいえる。それは豊かすぎるほどの陽光の下に形づくられた、わが国の現状肯定的な、むしろ理念のないしたたかさをもつ「夏の文化」とは、みごとに対比をなしている。

第一次大戦の終わりに当たって『西洋の没落』を著したシュペンゲラーは、世界史のうちに、大地から生起し開花し、そして衰退してゆく諸文化の壮大なドラマを見た。今日、機械技術文明の世界化と国際的相互依存関係の増大、世界の一体化のなかで、かえってこの土に根差した諸文化の相互異質性、その相互接触からひき起こされる摩擦、傷つけ合いの政治・軍事・経済的重大性がクローズアップされつつある。

ヨーロッパ史の勉強をはじめてすでに二〇年をこえたが、つねに念頭を去らなかつたのが、ヨーロッパに対するこの違和感と、「文化交流」は傷つけ合うということであつた。国際社会に生きる日本の道は、最近とみに厳しさを増している。本書は、ヨーロッパの精神風土を探り、ヨーロッパの過去と現在から日本へ、また日本からヨーロッパへとという対話的思考の繰り返しによって、明日の日本がいかにあるべきかを考察したものである。大半が昨年から今年にかけて雑誌等に発表したものであるが、このたび全面にわたる加筆を行った。最後に、論文の選択や構成に尽力を惜しまれなかつた日本経済新聞社出版局の大谷潔氏に感謝の意を表する。

一九七四年 盛夏

木村 尚三郎

目次

はしがき

I 過去への旅、現代への旅

旅の思想……………9

過去人との対話……………17

変貌する現代フランス……………21

II 都市文明のゆくえ

「都市」の終焉……………43

現代都市の条件……………54

高度都市文明と農業……………73

III わが体験的フランス論

ひとり旅のレストラン……………91

IV

新しい個性の創造

ポタージュの思想……………

105

ニース風サラダ……………

119

現代社会と教育……………

135

無差別評価の神話……………

146

創造的能力とは何か……………

159

V

歴史の岐路に立って

日本「第二ローマ帝国」論……………

171

多民族国家への道……………

189

エメラルドの誇り……………

198

I 過去への旅、 現代への旅

旅の思想

「坂の体験」

六月はじめのこと、地中海に近い南フランスのエクス・アン・プロヴァンスは、もう夏であつた。どこまでも青く抜けるような空に「ボー・ソレイユ」（美しの太陽）が輝き、豊かすぎるほどの光は束となって透明な大気を貫き、糸杉やオリーブの葉の上で、声なく乱舞していた。

昼さがりのひととき、光と静寂が四囲を支配するなかで、私は大学から学生寮への坂道をひとり喘ぎながら上っていた。ヨーロッパの土にはじめて接してから二カ月が過ぎていたが、船便で送った夏物の衣類が届かず、いまだ三月末に日本をたった時のままの、長袖の下着にワイシャツ、厚地の背広という服装だったのである。はた目には哀れとか滑稽とかしか言ひようのない格好ながら、当人はしごく真面目に苦しい思いであつた。暑さは大の苦手である。しかしながら、その目くるめく光の洪水のなかを、それにじっと耐えながら歩んでいたとき、どうしたわけか突然ひとつの想念

が全身を貫き、思わずハツとなった。

「私の学問は、本質的にツーリスティック（旅人的、観光客的）ではないか。今まで二〇年間もそうだったし、今後もそうだろう」そのような思いがなぜそのとき急にはつきりと出てきたのか、それは今もってよくわからない。以前から、漠然とした形では潜在していたのかもしれない。しかしこのときのいわば「坂の体験」は現在もお大きな意味を持っており、私にとって学問は旅、の思いはいよいよ強く私をとらえる。

そこには、さまざまな意味がこめられている。第一は、人間世界を認識する、理解する、対象を見てとる、ということの本来的な無責任性についてである。観光客は楽しむために現在地を離れ、違った土地、違った国へとやってくる。要するに自分が楽しければそれでよく、相手の土地や国、そこに住む人々を真面目に理解せねばならぬといった義務感は伴わない。観光客の目は、とどのつまり一方的、自己中心的であり、本質において無責任である。その目にうつり、とらえられたものは往々にしてはなだしい誤解を含んでおり、しかもまた誤解が含まれているかどうかを確かめねばならぬ必要もない。偶然を本質と取り違え、小事が大事に見え、そして肝心の大事は見落とすという過誤は、いかに慎重な旅人でも避けることができない。

それに、本気で考えてもわからないことはいくらでもある。たとえば欧米人は、なぜあんなに議論好きなのか、自分の言いたいことを、徹底的にすみからすみまで言ってしまうと気が済まないのはどうしてなのか。なぜさかんに握手をするのか、挨拶に男同士が抱きあったりもしている

が、ああいうことは好きでやっているのか、いやいやながらやっているのか、そのどちらでもないのか。同じラテン系民族でもフランスの鉄道は時間が正確なのに、スペインは実は大まかなのはなぜか。考えても、また当の相手に尋ねてもはつきりわからない、しかしこちらが相手を知る上に肝心、といった事柄はじつに多い。仕方がないからこれを往々にして「国民性」「民族性」ないしは「時代の狂気」とかで片付けるが、そのときは明らかに、旅人としての一方的割り切りが強行されている。

ヨーロッパ中世史ないしフランス法社会史が私の専門分野であるが、過去の認識とか、理解とかは、当然にこの旅人的誤解と一方的、自己中心的な割り切りを含まざるをえない、と思う。忠実な過去の再現など、絶対に不可能である。

まず匂い、音、光といったものが、現在のわれわれの世界と違うだろう。江戸時代には電気がないから夜は暗かったに違いない、とは誰でも想像がつく。しかしその「想像」は、せいぜい電灯を蠟燭や行灯の火に置き換えてみる程度にすぎない。じっさいに明かりがついていたのはお通夜の家だけだったとか、女は提灯をつけて歩くと襲われる危険があったから、暗やみのなかをひっそりと歩いた、などということにまでは到底思いたらない。このことは歌舞伎の坂東三津五郎さんのお話にあったのだが、その時代に生きていればまったく当たり前の、しかしあまりにも当たり前であるが故にとくに語られない肝心な事柄は、時代がさかのぼればさかのぼるほど、人々の記憶から消し去られていく。そして、このぼっかりあいた大きな空間を知らず知らず現代人の常識が埋めてし

まう。

異国の過去ともなればなおさらのことで、どんなに注意深く史料を読んだとしても、現代人ないしは現代日本人の一方的な思い込みを防ぐことはできない。思い込みを徹底的に防ぐには、過去のそれぞれの時代なり地域なりがまとまった意味をもつと考えるのを、そもそも断念しなければならぬだろう。神、都市、国家、自由といった言葉が中世人によって発せられたとき、そこにどのような意味合いが含まれていたのか、どのような感覚が人々を支配したのかは、もうはつきりとはわからない。だいいち物事の本質を知るのに、史料なぞそれ自体としては何ほどの役に立つであろうか。書かれたことよりも書かれなかったことのほうが圧倒的に多いことは自明のことである。ジェームズ・ジョイスは『ユリシーズ』を、六人の男女について、たった二四時間のあいだの心理描写に費やしたが、それですら大部分は省略されているはずであり、ひとりの人間の心に起こる一日の動きをすべて忠実に記録したとすれば、数百巻、数千巻を要するだろうというトインビーの指摘は、まことに正しい。

書かれた史料そのものが、記述者の主観はともかくとして、客観的には一方的であり、無責任である。そこから確かめうるのは、たとえばジャンヌ・ダルクが一四一二年一月六日生まれであるかどうかといった単純な事実、つまり事物を形づくる履歴書的な素材だけである。それはわかるにこしたことはないが、たとえ明らかにしたとしてもそこから自然にジャンヌの人柄や行為の意味が明らかになるわけではないことは、履歴書のばあいと同じである。ある時代の史料を完全に渉猟し

つくしたとしても、そこから直ちに過去像を再現することはできないし、またその客観性を期待することもできない。いかに注意深く、良心にしたがって過去像を構成したとしても、それはいったい、観光客の通りいっぺんの無責任な観察と、どれだけ異なりうるのか。歴史家は、結局のところ異質な過去世界での旅人であり、旅人の印象としての誤解、偏見、無責任性を免れることはできないと思う。

過去への旅

私にとって学問は旅、という意味は、まずこのことなのであるが、大切なことはその先にある。肝心なのは史料を求める心、過去を求める心であろう。旅の楽しさは、事情のわからぬ土地にありながら住みつく気はなく、あくまでも土地になれずにひとり違和感と緊張感をもって、少し大げさに言えば何ほどか生きる不安を感じつつ体を張って動いているところから生まれる。海外旅行のばあいとくに経験されることであるが、家族も友人もなく、頼りは携行する金銭と薬品だけといった状況におかれると、自己防衛上、知らず知らずのうちに五感は研ぎすまされ、神経は鋭くピンと全身に張りめぐらされる。その感度は最大に高められてメーターの振れは大きく、ちょっとした異常、日ごろの常識とは違う新奇性にもたちまち反応してハッと驚く。そして強く喜怒哀楽の情が生じ、自分にとって異常な事柄の意味をあれこれ考えたり、それに何とか対処しようとしたりする。

生きる上で何が起こるかわからないといった不安感と、これによるハツとした驚きの連続こそ、旅の印象を強烈にし、旅人を楽しませる。旅の楽しみは、旅の不安、すなわち日常的世界からの離脱、日常性からの脱却より生じる不安感と、まさに表裏一体をなしているといえよう。旅での驚き、喜びや怒りは、結局のところ誤解の連続かもしれない。しかしながら常識が常識ではない、あるいは少なくともそう映る異境の地を旅するとき、人ははじめて言いしれぬ不安を覚え、自らの常識、自らの日常的感觉を問い直し、自分で自分を客観化しようとする。この旅の心こそ、学問の心ではないか。他人、他国に接し、不安のうちに誤解にもせよこれを知るといふことは、すなわち自己を知ると、だてにほかならない。

……私は、成年に達して自分の先生たちの手から解放されるやいなや、書物の学問をまったく捨てたのである。そして、私自身のうちに見出されうる学問、あるいはまた世間という大きな書物のうちに見出されうる学問のほかは、もはやいかなる学問をも求めまいと決心して、私は私の青年時代の残りを旅行に用い、あちらこちらの宮廷や軍隊を見、さまざまな気質や身分の人々を訪れ、さまざまな経験を重ね、運命が私にさし出すいろいろな事件の中で私自身を試そうとし、いたるところで、自分の前に現われる事物について反省してはそれから何か利益を得ようとつとめたのであった。(デカルト『方法序説』野田又夫訳)